

「みんな」に関する諸問題の検討と考察

大塚 貴史

キーワード：「みんな」、「全員」、特定性、例外、集合

要 旨

「みんな」には、人物の特定性を問題としない、例外の存在を許容することがあるという特徴が見られる。これらの特徴は「全員」には見られないものである。このことは、「みんな」は集団に視点を置くのに対し、「全員」は集団内の個々の人物に視点を置くという相違があることを示唆している。また、この相違を集合の観点から考察すると、「みんな」は「上位集合」の「内包」に注目して部分集合を形成するのに対し、「全員」は「上位集合」の「外延」に注目して部分集合を形成すると言える。

1. 研究の背景と目的

1.1 研究の背景

飛田・浅田（1994: 518）によれば、次のような場合の「みんな（みな）」は「ある範囲を定めて、その範囲の人間全部」を表している。

- (1) a. このパゴダはクラスのみんなで作った。¹ （飛田・浅田 1994: 518）
b. ぼくが発言するのはみんなの意見を聞いてからだ。 （飛田・浅田 1994: 517）

¹ 文献から引用、あるいはコーパスから収集した例文などには、末尾にその出典を記す（出典が明記されていないものは筆者の作例）。また、コーパスは「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ）を用い、コーパス検索アプリケーション「中納言」によって例文を検索した。なお、議論の都合上、引用した例文などに特に断りなく下線を付す、比較対象とする表現を併記する場合がある。

確かに、(1a)は「クラス (の生徒)」という範囲の「人間全部」で「(パゴダを) 作った」ということを表したものと言える。また、(1b)も非明示的ではあるものの話者にとっては特定の範囲(「会議の出席者」など)が念頭にあり、「その範囲の人間全部」の「意見」ということを表しているように読める。しかし、実例の観察などを踏まえると、「みんな」に関する飛田・浅田(1994)の説明には問題があることが明らかになる。

1.2 特定性の問題

まず挙げられる問題が人物の特定性である。前掲の(1)の場合は人物が具体的に想定されている、言い換えれば「みんな」が特定の人物を指して用いられていると推察される。例えば、(1a)では「クラス」の生徒が、(1b)では会議の出席者などが具体的に想定されていると考えられる。しかし、「みんな」を用いる場合に常に特定の人物が想定されているとは限らない。

- (2) a. 「そう言うたら、あの時、デーヴィッドはんが言うてはった」「どない言うてはったん」「人間の命は自分一人のもんやない。みんなのためにあるんや。重い病気で死にそうになって助かったもんは、その命をみんなのために使うよう使命を受けてるんやって」 (『北海道新聞』(2002年1月17日朝刊))
- b. 楽しいイベントがいっぱい。みんな遊びにきてね。人形劇、ヨーヨーとりなどを予定しています。 (『広報くりはし』(2008年4号))

(2a)の「みんな」は「自分」の周りの人物などを、(2b)の「みんな」は広報を目にした人物などを指していると推察されるが、いずれも特定の(具体的な)人物が想定されているとは考えにくい。つまり、「みんな」はある範囲を定めて特定の人物を指す場合もあれば、そうでない場合もあるということになる。以下、この問題を「特定性の問題」と呼ぶ。

1.3 例外の問題

また、飛田・浅田(1994: 518)は「みんな」がある範囲を定めた上で「その範囲の人間全部」を表すと述べるが、そうでない場合にも用いられることがある。

- (3) このクラスはみんな半袖のシャツを着ている。

飛田・浅田（1994）の記述に基づけば、(3)は「クラス（の生徒）」という範囲において、「その範囲の人間全部」が「半袖のシャツを着ている」という状況を表すことになる。確かにそうした状況を指して(3)のように述べることは可能であるが、その一方で、「クラス（の生徒）」という範囲内の一部が「半袖のシャツ」でない服を着ていたとしても、(3)は自然な文として成立するようと思われる。つまり、(3)は(4a)のような場面でも(4b)のような場面でも成立するということになるが、後者では「半袖のシャツを着ている」の例外が存在することになり、「みんな」は「範囲の人間全部」を指しているとは言えない。以下、この問題を「例外の問題」と呼ぶ。

- (4) a. 40名から成るクラスにおいて、40名が半袖のシャツを着ている。
- b. 40名から成るクラスにおいて、35名は半袖のシャツを着ており、5名は半袖のシャツでない服を着ている。

なお、この問題は先行研究でも指摘されている。佐藤（2017: 3）は、「みんな」は「母語話者が、ある集合の全要素が該当することを表すという直観をもっている」にも拘らず、例外が存在する場面でも使用が許されると述べる。一方で、一般的には「みんな」と類義の語とみなされる「全員」については、そのような場合の使用が制限されると言う。例えば、佐藤（2017: 6）は(5)について、「常識的に考えて一億人を超える日本人が例外なく勤勉であるとは考えられない」が、「みんな」については使用が可能であるとしている。

- (5) 日本人は {みんな / *全員} 勤勉だ。 (佐藤 2017: 6)

つまり、(5)は「日本人」という範囲において「その範囲の人間全部」が「勤勉」であることを表しているわけではなく、「勤勉」でない者（例外）の存在も許容されているということになる。

1.4 本稿の目的

以上より、「みんな」に関しては少なくとも次の2つの問題があり、その点において検討の余地があると言える。

(6) 特定性の問題：

「みんな」は指し示す人物が特定されている場合に用いられるとされるが、特定されていない場合にも用いられる。

(7) 例外の問題：

「みんな」はある範囲内のすべての人物を指して用いられるとされるが、当該範囲内に例外が存在する場合にも用いられる。

特定性の問題を指摘した先行研究は管見の限り存在せず、例外の問題も佐藤（2017）によって現象が指摘されるに留まり、その要因について検討した先行研究は見られない。以下では、特定性の問題と例外の問題について「全員」との比較を通して検討し、「みんな」の特徴を明らかにする（2節と3節）。また、先行研究において「みんな」が集合を形成するものであることが示唆されている（後述）ことに鑑み、「みんな」の特徴を集合の観点から考察することを試みる（4節）。

2. 特定性の問題の検討

2.1 「全員」との相違点

まず、特定性の問題を取り上げる。2節で確認したように、「みんな」は(1')のように特定の人物を指す場合もあれば、(2')のように特定の人物を指しているとは言えない場合もある。

(1') a. このパゴダはクラスの {みんな/全員} で作った。

b. ぼくが発言するのは {みんな/全員} の意見を聞いてからだ。

(2') a. 「そう言うたら、あの時、デーヴィッドはんが言うてはった」「どない言うてはったん」「人間の命は自分一人のもんやない。{みんな/??全員} のためにあるんや。重い病気で死にそうになって助かったもんは、その命を {みんな/??全員} のために使うよう使命を受けてるんやって」

b. 楽しいイベントがいっぱい。{みんな/??全員} 遊びにきてね。人形劇、ヨーヨーとりなどを予定しています。

この現象を踏まえると、「みんな」は人物の特定性を重視しない形式であると言える。これに対し、「全員」は(2')のような場合には用いにくい。このことから、「全員」を

用いる場合には人物が特定されていることが重要となると言える。

2.2 人物が特定される場合

しかし、人物が特定される場合であれば常に「みんな」の使用が許されるというわけではない。例えば、(8a)は「社内」の「六十～三十代まで」を、(8b)はある音楽グループを範囲としており、その範囲内の人物は特定されていると考えられるが、これらの文では「みんな」は用にくい。

- (8) a. 私は派遣社員で、派遣されている会社の中で最年少、たったひとりの二十代です。社内は六十～三十代まで {全員/?みんな} で二十人くらいの外資系企業です。
(Yahoo!知恵袋 (2005年))
- b. ほほ原曲に近いアレンジで、若さ溢れるアップテンポなコーラスワークがピッタリ！ノリノリな感じで聴きやすい。5人 {全員/?みんな} がリード・ヴォーカルを取れる彼等の歌唱力はホントに素晴らしい。
(Yahoo!ブログ (2008年))

(8)において特徴的なのは、「六十～三十代まで」に該当する社員の全数、あるいは音楽グループのメンバーの全数に言及しているという点である。全数に言及することは、範囲内の人物をひとりひとり欠落なく取り上げ、それを数え上げるということである。そのためには、範囲内の個々の人物に視点を置くことが求められる。このような場合に「全員」が用いられることは、この形式が個々の人物に視点を置き、ある範囲内の人物を欠落なく取り上げようとする特徴があることを示唆している。これに対し、(8)での許容度が低い「みんな」はそのような視点を持たないということになる。その上で「みんな」の特徴について積極的に述べようとするならば、それは複数の人物を一括し、その集団自体に視点を置くものであると考えられる²。このとき、

² 飛田・浅田(1994)は、「みんな」には「全部の人間を表す」場合と「物事の総体を表す」場合があるとする。前者の例としては本文中の(1)のような例を挙げ、後者の例としては次の(i)(ii)のような例を挙げる。

(i) うちが家族がみんな風邪をひいている。

(ii) ここにあったケーキ、みんな食べちゃったの？ (いずれも飛田・浅田1994:518)

この後者の「みんな」について、飛田・浅田(1994:518)は「構成要素を一つ一つ吟味することなく、まとめて一つに扱う暗示がある」と述べている。飛田・浅田(1994)がどのような基準を以って「全部の人間を表す」場合と「物事の総体を表す」場合を区別しているかは不明瞭であり、後者についてのみ「(構成要素を)まとめて一つに扱う暗示がある」とすることの論拠(文法現

個々の人物については特段の意識が払われることはなく、漠然と取り上げられることになる。そのため、「みんな」は(8)のように範囲内の人物の全数に言及するような環境には馴染まないのである。したがって、「みんな」と「全員」には次のような相違があると言える。

- (9) 「みんな」は集団に視点を置く。
(10) 「全員」は集団に含まれる個々の人物に視点を置く。

「みんな」と「全員」にこうした相違があることは、他の現象によっても示唆される。例えば、(11)の文では「みんな」が問題なく用いられる一方で、「全員」の使用は避けられる。

- (11) a. ぼくはスツとタイヤのかけから出ると、思いっきり、{みんな/??全員}のほうへボールをけつとばした。(さとうまきこ『ぼくの・ミステリーなぼく』)
b. 陽子は、こんなに間近でサルを見るのははじめてだった。[筆者略] ボスとみんなの目が、あったような気がした。とたんに光彦たちは、ぎくっとした。ボスが尻をおったてて、のっそりのっそり {みんな/??全員}のほうへ歩みよってきた。(吉本直志郎『きょうも朝から夏やすみ』)

(11)においては、「ボール」「ボス」の数はひとつ(1匹)であるため、その移動先も必然的にひとつ(1箇所)であるが、移動先として想定される場所には複数の人物がいるものと推察される。この場合、その複数の人物(人物がいる地点)を「ボール」「ボス」の移動先として適格なものとするためには、それをひとつの集団として一括りにすることが求められる。そのため、個々の人物に視点を置く「全員」ではなく、集団に視点を置く「みんな」が用いられるのである。

2.3 人物が特定されない場合

また、人物が特定されているとは言えない場合に「みんな」の使用のみが許容されることも、2.2節で述べた「みんな」と「全員」の視点の相違が関係している。

象など)も特に示されていない。しかし、この飛田・浅田(1994)の記述に沿って言えば、本稿の議論では「みんな」を用いる場合は一様に複数の人物を「まとめて一つに扱う」と指摘することになる。

- (2') a. 「そう言うたら、あの時、デーヴィッドはんが言うてはった」「どない言うてはったん」「人間の命は自分一人のもんやない。{みんな/??全員} のためにあるんや。重い病気で死にそうになって助かったもんは、その命を {みんな/??全員} のために使うよう使命を受けてるんやって」
- b. 楽しいイベントがいっぱい。{みんな/??全員} 遊びにきてね。人形劇、ヨーヨーとりなどを予定しています。 (いずれも再掲)

前述の通り、(2') は「自分」の周りの人物や広報を目にした人物を指していると考えられるが、「みんな」はこれに該当する複数の人物をひとつの集団としてまとめて指し示しているのである。このとき、具体的な人物やその数については問題とされない。反対に、「全員」は個々の人物に視点を置くため、これを問題としない文脈では用いられないと考えられる。

3. 例外の問題の検討

3.1 「全員」との相違点

次に、例外の問題を取り上げる。1.3 節で述べたように、「みんな」はある範囲内のすべての人物を指して用いられるとされるが、そうとは言えない場合にも用いられる。

- (3') このクラスは {みんな/#全員} 半袖のシャツを着ている。
- (5) 日本人は {みんな/*全員} 勤勉だ。 (再掲)

(3') は、「全員」を用いた場合は (4a) のような状況が想定されるが、「みんな」を用いた場合は (4b) のような状況も想定される。後者の状況では「半袖のシャツを着ている」の例外が存在すると言える。

- (4) a. 40名から成るクラスにおいて、40名が半袖のシャツを着ている。
- b. 40名から成るクラスにおいて、35名は半袖のシャツを着ており、5名は半袖のシャツでない服を着ている。 (いずれも再掲)

また、(5)についても「全員」を用いた場合は (12a) のような状況が想定されるが、「み

んな」を用いた場合は(12b)のような状況を想定することもできる。

- (12) a. 日本人は例外なく勤勉である。
- b. 日本人は多くが勤勉であるが、そうでない者も存在する。

ただし、佐藤 (2017) によれば (12a) のような状況はそもそも想定し得ず、「勤勉」の例外に当たる人物の存在を前提としている。そのため、(12b) の状況を表現することができる「みんな」のみが使用を許される。

したがって、「みんな」は例外を許容し得るが、「全員」は例外を許容し得ないということになる。なお、コーパスから収集した実例には次のような「みんな」の使用例も見られた。

- (13) 新郎が、赤い帯をひらひらつけた短剣で、笹の葉で編んだ長方形のものを三度突き刺す、という動作をしたとき、まわりがちよっとどよめき、新婦が顔を赤らめてうつむいた。その様子があまりに初々しいのでコーディネーターに尋ねると、新郎新婦は、今夜が、正しい意味での初夜なのだそうだ。「バリでは、みなそうです。結婚するまでは、みなバージンね。宗教でそうなりますから」みんなって、本当にみんなですか？ とさらにしつこく尋ねると、最近では例外もあって…とあまり話したくなさそうな様子。

(俵万智『ひまわりの日々』)

(13) では、「みんな」と発話した話者自身が例外の存在を認めている (波線部)。こうした例からも、「みんな」は例外の存在が認識されている場合でも使用可能であることが分かる。

3.2 例外の存在を許容する要因

「みんな」が例外の存在を許容することにも、2節で指摘した「みんな」の視点に関与していると考えられる。2節では、「みんな」と「全員」の振る舞いの違いから、「みんな」は集団に視点を置くものであり、個々の人物については漠然と取り上げられると述べた。ここに例外が介入する余地がある。つまり、「みんな」を用いて前掲の(3')のように述べる時、話者の視点は「クラス」という集団自体にあり、その内部の人物が例外なく「半袖のシャツ」を着ているということにまで言及しているわけ

ではない。これに対し、「全員」を用いて述べる時は、話者の視点は集団内の個々の人物にある。つまり、「半袖のシャツ」でない服を着ている者がひとりでも存在すれば（例外の存在が認められれば）、その発話は不自然になるのである。

4. 考察

4.1 佐藤（2017）による示唆

以上、ここまで「みんな」に関する2つの問題を示し、その検討を通して「みんな」と「全員」が異なる視点を持つ形式であることを明らかにした。ところで、1.3節で述べたように、佐藤（2017: 3）は、「みんな」が「母語話者が、ある集合の全要素が該当することを表すという直観をもっている」にも拘らず、例外が存在する状況でも使用が許されると述べるが、これと同様の現象が観察される形式として、取り立て詞の「ばかり」と頻度副詞の「いつも」を挙げている。

(14) (月曜日から土曜日はビールを飲み、日曜日はワインを飲んだ場合)

a. 先週はビール {ばかり / *だけ} 飲んだ。

b. *先週はビールしか飲まなかった。 (いずれも佐藤 2017: 6)

(15) 君は授業中 {いつも / ??常に} 居眠りをしているよね。 (佐藤 2017: 5)

このうち、佐藤（2017）は特に「ばかり」を取り上げ、その集合形成の動機について考察している。佐藤（2017: 9）によれば、「ばかり」は「主体にとって非常に捉えられやすいものを知覚する」ことによって集合を形成する。佐藤（2017）はこの「主体にとって非常に捉えられやすいもの」のことを「認知的際立ち性」と呼ぶ。つまり、「ばかり」は認知的際立ち性を持つ事態による集合を形成し、そうでない事態は集合の構成要素とならないため、結果的に例外を許容すると言うのである。

前述の通り、佐藤（2017）の中心的課題は「ばかり」の分析であるため、「みんな」と「いつも」については現象の観察に留まっている。その一方で、これら3形式は「いずれも集合形成という特徴をもつ点で共通する」（佐藤 2017: 5）とし、それぞれが「別形式である以上、集合形成を動機づける要因はそれぞれに個性があるはず」（佐藤 2017: 5）と述べている。この指摘に基づき、以下では「みんな」及び「全員」の特徴について、集合の観点から考察する。

4.2 上位集合との関係

一般に、名詞句には指示する対象の範囲が定まっている「定名詞句」と、指示する対象の範囲が定まっていない「不定名詞句」の区別があるとされる。このうち前者は単独で用いることが可能であるが ((16))、後者は単独では用いにくく ((17))、適切な「上位集合」が設定される必要がある ((18)) と言われる (丹羽 2004: 2-6)。

- (16) a. あの人はどこへ行くの。
b. 雪は白い。 (いずれも丹羽 2004: 1)
- (17) a. ?誰かは、道子のことが好きらしい。
b. ?多くの社員たちは、5時になるとすぐ帰る。
- (18) a. 3年B組の誰かは、道子のことが好きらしい。
b. 大安商事の多くの社員たちは、5時になるとすぐ帰る。 (いずれも丹羽 2004: 6)

特に(18)について、丹羽 (2004) は次のように述べている。

- (19) ここで、ある対象 X の要素または部分集合が Y である時、その X を Y の上位集合と呼ぶことにする。「3年B組の生徒たち」という集合は、「3年B組の(生徒たちの)誰か」を要素とする上位集合であり、また、「大安商事の社員たち」は部分集合「大安商事の多くの社員たち」の上位集合である。 (丹羽 2004: 6)

本稿の考察対象である「みんな」及び「全員」も、ある上位集合³を想定しなければ用いにくいことから両形式はいずれも不定名詞句であり、上位集合に対して部分集合を形成するものであると考える。前述の通り、飛田・浅田 (1994: 518) は「みんな」について「ふつうある範囲を定めて、その範囲の人間全部」を表すと述べるが、この「ある範囲」が上位集合のことを指していると考えられる。例えば(1)においては、「みんな」は「クラスの生徒」「会議の出席者」といった上位集合に対し、その内部に部分集合を形成しているのである。

³本稿では丹羽 (2004) に倣い、ある対象 X の要素または部分集合が Y である時、その X を Y の「上位集合」と呼ぶ。

- (1) a. このパゴダはクラスのみんなで作った。
b. ぼくが発言するのはみんなの意見を聞いてからだ。 (いずれも再掲)

このとき、「みんな」が「範囲の人間全部」を表すとすれば、それは「みんな」が形成する部分集合に含まれる要素の数が上位集合のそれに等しいことを示している。例えば、(1a)の上位集合「クラスの生徒」が40の要素で構成される（40名の生徒から成る「クラス」である）場合、「みんな」が40の要素で構成される部分集合を形成すれば、(1a)の「みんな」は「範囲内の人間全部」を表していると言える。

4.3 「全員」による集合形成

このように、「みんな」及び「全員」が上位集合に対する部分集合⁴を形成するものであるということを踏まえ、両形式が形成する集合の特徴について考察する。議論の都合上、まずは「全員」から取り上げる。

2節では、特定性の問題の検討を通し、「全員」は特定の人物を想定し得る場面であれば用いにくいということを明らかにした。

- (1') a. このパゴダはクラスの {みんな / 全員} で作った。
b. ぼくが発言するのは {みんな / 全員} の意見を聞いてからだ。
(2') a. 「そう言うたら、あの時、デーヴィッドはんが言うてはった」「どない言うてはったん」「人間の命は自分一人のもんやない。{みんな / ??全員} のためにあるんや。重い病気で死にそうになって助かったもんは、その命を {みんな / ??全員} のために使うよう使命を受けてるんやって」
b. 楽しいイベントがいっぱい。{みんな / ??全員} 遊びにきてね。人形劇、ヨーヨーとりなどを予定しています。 (いずれも再掲)

この現象は、「全員」は具体例やその数が明確でない集合は形成できない、言い換えれば、「全員」は具体例やその数に注目して集合を形成するというを示している。このとき、集合に含まれる具体例やその数を「(集合の) 外延」と呼べば、「全員」は外延に注目して集合を形成すると言うことができる⁵。

⁴ただし、この部分集合は上位集合と等しくなる場合があるため、「真部分集合」ではないという点に留意されたい。

⁵中俣（2015）は、並列表現に関する議論において、集合を構成する要素の具体例やその数を

また、(1')において「全員」を用いる場合、「パゴダ」の作成に関与しなかった生徒もいるという解釈は生じにくい。これは例外の問題に関わることであり、佐藤（2017）も次の文において「勤勉」に該当しない「日本人」の存在を認めながら「全員」を用いることは不自然であるという旨の指摘をしていた。

(5) 日本人は {みんな / *全員} 勤勉だ。 (再掲)

つまり、「全員」が形成する集合の外延は上位集合のそれと常に等しくなるということになる。こうした点に鑑みれば、「全員」による集合形成については次のようにまとめることができる。

(20) 「全員」は上位集合 A の外延に注目して $A=B$ となる集合 B を形成する。

4.4 「みんな」による集合形成

これに対し、「みんな」は前掲の (2') のように特定の人物を想定し得ない状況であっても使用が許される。また、前掲の (5) のように「勤勉」に該当しない「日本人」の存在を許容する場合にも「みんな」を用いることが可能である。つまり、「みんな」は上位集合の外延に注目して部分集合を形成するとは考えられない。では、「みんな」はどのように集合を形成するかと言えば、それは上位集合の要素に共通する属性、すなわち上位集合の「内包」に注目するものであると考える。例えば前掲の (5) では、「みんな」の形成する部分集合が上位集合と内包「日本人」を共有しているということになる。このとき、具体的にどのような要素が、あるいはどのくらいの数の要素が集合に含まれるかという外延的な問題には注目されず、いわば「背景化」（中俣 2015: 63）されていると考えられる。したがって、「みんな」の集合形成については次のようにまとめることができる。

(21) 「みんな」は上位集合 A の内包に注目して $A \supseteq B$ となる集合 B を形成する。

3.2 節では、「みんな」は範囲内に含まれる人物の全数に言及する文では用いにくいと述べたが、それは、こうした文が外延に注目して集合を形成することを要求するもの

「集合の外延」、要素間に共通の構造や属性を「集合の内包」と呼んでいる。本稿で用いる「外延」「内包」は、この中俣（2015）に倣ったものである。

であることから、内包に注目して集合を形成する「みんな」が馴染まないためである。

- (8) a. 私は派遣社員で、派遣されている会社の中で最年少、たったひとりの二十代です。社内は六十～三十代まで {全員／??みんな} で二十人くらいの外資系企業です。
- b. ほぼ原曲に近いアレンジで、若さ溢れるアップテンポなコーラスワークがピツタリ！ノリノリな感じで聴きやすい。5人 {全員／??みんな} がリード・ヴォーカルを取れる彼等の歌唱力はホントに素晴らしい。（いずれも再掲）

また、前述の通り「みんな」は例外の存在を許容する場合があるが（例外の問題）、このことも「みんな」が上位集合の内包に注目することに起因している。例えば次の場合、「みんな」は上位集合の内包「このクラスの生徒」を共有している部分集合の要素が「半袖のシャツを着ている」ということを述べているのであり、要素の具体例や数（外延）は問題としていないのである。

- (3) このクラスはみんな半袖のシャツを着ている。（再掲）

つまり、「みんな」は例外が存在する状況でも用いられるが、その例外とは上位集合と「みんな」が形成する部分集合との差に当たる補集合の外延のことであり、「みんな」が形成する集合内に例外が存在しているわけではない。

ただし、集合の外延、特に要素の数についてはまったく問題にされないわけではない。例えば、「半袖のシャツ」を着ている人がクラス内の一部の生徒に限られる場合（例えば40名中10名）、それを以って(3)のように述べることは適切とは言えない。また、周囲の数名の人物（親族や友人など）が「勤勉」であることのみを根拠として(5)のように述べることも不適切である。これは、要素の数が少なければ少ないほど上位集合の内包を共有する部分集合を形成しにくくなるためであると思われる。つまり、「半袖のシャツ」を着ている人物がクラスの全生徒とほぼ同数であれば、それらに共通する属性として「このクラスの生徒」を抽出することは容易であるが、数名に限られる場合は「男性」「野球部の部員」などの共通属性を見出せる可能性も生じる。同様に、(5)についても、仮に周囲の数名の人物が「勤勉」であったとしても、それらの人物については「日本人」という共通属性を認める以前に「親族」や「友人」という共通属性を持つと把握される可能性がある。しかし、「日本人」という属性での

み共通するほどの数の人物について「勤勉」であると認識すれば、それらの要素の共通属性として「日本人」を認めやすくなり、上位集合の内包「日本人」と共有する部分集合を形成して(5)のように述べやすくなるのである。

5. まとめと今後の課題

以上、本稿では「みんな」の諸問題に関する検討を通して、まずは「みんな」は集団に視点を置くのに対し、「全員」は集団に含まれる個々の人物に視点を置くという相違があることを明らかにした。また、これを集合の観点から考察し、「みんな」は上位集合の内包に注目して部分集合を形成するのに対し、「全員」は上位集合の外延に注目して部分集合を形成するという相違があることを明らかにした。

前述の通り、佐藤 (2017: 3) は「ばかり」「いつも」「みんな」について、「母語話者が、ある集合の全要素が該当することを表すという直観をもっている」にも拘らず、例外が存在する状況でも使用が許される形式であることを指摘したが、本稿はこのうちの「みんな」が例外を許容する要因について、視点や集合形成の特徴から明らかにしたと言える。しかし、佐藤 (2017) も述べるように、頻度副詞「いつも」についてはまた独自の集合を形成していると考えられる。今後、これを初めとする「ある集合の全要素が該当することを表す」形式について広く考察し、その内実や形式間の関係性などを明らかにしていきたい。

参考文献

- 佐藤琢三 (2017) 「〈全該当〉を表す語の主観性—取りたて助詞「ばかり」を中心に—」『國語と國文學』94(3), pp.2-16, 東京大学国語国文学会。
- 中俣尚己 (2015) 『日本語並列表現の体系 (シリーズ言語学と言語教育 第33巻)』ひつじ書房。
- 丹羽哲也 (2004) 「名詞句の定・不定と「存否の題目語」」『国語学』55(2), pp.1-15。
- 飛田良文・浅田秀子 (1994) 『現代副詞用法辞典』東京堂出版。

参考資料

- 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(Ver. 1.1) https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ (最終確認日: 2019年8月6日)

「みんな」に関する諸問題の検討と考察（大塚貴史）

おおつか たかし／人文社会科学研究科